

「民間信仰から見たアジアの稲作社会」 ～カンボジアの村落から～

第22回 大賞受賞者
アン・チュリアン
ANG Choulean
カンボジア/民族学

開催日/2011年9月18日
会場/アクロス福岡
地下2階イベントホール
参加者/300人

第1部 講演

カンボジアと日本に共通する精霊信仰の概念

カンボジアには、インドから宗教が入ってくる前から、人々に根付いている精霊信仰＝アニミズムがあります。ここでは、カンボジアのアニミズムとしてネアク・タ信仰について説明するとともに、日本のアニミズムといえる「神道」との共通点についてもみていきたいと思います。なお、この講演では便宜的に仏教、ヒンズー教について触れることは避けておきます。

最初にアンコール地域北西部にある村を紹介します。村の中心に見られる木製の支柱は、クメール語でブラブームといわれ、目には見えない村のコミュニティの土地、土のエネルギーを表象しています。村人はここで豊饒のための雨乞いの儀式などを行います。小さなこの支柱は村のエネルギーを具現化するもので、支柱に水を流しかける儀式は、村全体に雨をもたらすと考えられています。このような考え方はカンボジアの、特に農村の人々には強く根付いています。

次にアンコール地域北西部に限定せず、カンボジアに広く見られるネアク・タ信仰について紹介します。ネアク・タは、それぞれの村の守護霊で、二つのものが一つに合体するという意味があります。一つは、村の土地です。もっと広義で捉えれば家であったり、田んぼであったり、村の空間ともいえるでしょう。もう一つは男性という意味もあります。特定の人物ではなく、森を切り拓いて稲を作れるようにした村のバイオニア、ご先祖さまという存在です。ネアク・タは、時に木であったり石であったりして具現化されていますが、共通するのは稲作に強く関連して土地と人間との結び付きを表しているという点です。土地が豊饒にという思いが信仰と密接に関わっています。

日本のアニミズムともいえる神道とカンボジアのそれとを比べると、神官の存在など違いもありますが、見えない神という存在の抽象化など共通点があります。また、どちらも稲作文化と深い関連があります。例えば、神道の注連縄は稲わらでできていますし、伏見稲荷では稲苗を植える儀式がみられます。また、儀式にお酒を使う点も、よく似ています。ネアク・タの儀式では、各家庭から持ち寄った米でつくられたお酒をネアク・タに注いだ後、村人で分け合いますが、これは楽しむための飲酒ではなく、ネアク・タに近づくためのひとつのテクニック、やり方です。日本には御神酒がありますし、沖縄の竹富島でみられる御嶽(うたき)の儀式などをみると、お酒の使い方にも共通点がみられます。お酒を通じて神の世界に近づくのです。

カンボジアのネアク・タ信仰と日本の神道は、歴史のうえで直接的な関係はありませんが、おおむね同じタイプではないかと思えます。お酒の使い方、神の抽象性が非常に似ています。日本人は神道の中で誕生し、亡くなると仏教で葬式をすると聞きました。カンボジアもそうです。それ以外にも様々な共通点があると思えますので、これから調査したいと思います。

学 校 訪 問

実施日/9月16日 会場/福岡県立城南高校

生徒の感想

約800人の生徒たちを前にして、「こんなに多くの方の前で話すのは初めてです」と嬉しそうに講演を始めたアン氏。フランス統治下の影響が残る中、母国語ではなくフランス語で教育を受けた自身の経験を紹介し、母国語で自国文化を学ぶことの意義を語り、自国の言語や文化にもっと敬意を払うべきだと訴えました。生徒との質疑応答では「私たちが未来のためにできることはなんでしょう」という問いに対し、「まずは自分自身を作りあげ固めること。そのひとつづつが国の力となるのです」と回答しました。そのほかカンボジアとフランスの文化、日本や民族学についてなど、生徒から多くの質問が寄せられました。



自国の文化に誇りをもって大切に、発信していかなければいけないと思いました。

日本をより理解し、もっと良くするために日本を一度離れ世界を学びたい。

日常では気付かない自身の恵まれた状況に気付かされ、今自分たちにできることをしっかりやっていきたい。



人々の心の中にある信仰を消すことはできない

対談

対談者/石澤 良昭
(上智大学アジア人材養成
研究センター特任教授)



石澤氏 日本にもネアク・タ的なものたくさんあります。違いがあれば、似ているところもあります。アジアの稲作文化に共通する部分もありますね。まず、ネアク・タの儀式は、どんなときに、どんな方法で誰がイニシアチブをとって始めるのでしょうか。

アン氏 神官のような人はおらず、村の人々の信頼を集めている年長の方等が選ばれます。これは、村の民主主義にも関係します。村の人々の賛同により選ばれるのです。法律のようなものではありませんが、村の民主主義のようなものが人々の間にあるのです。

石澤氏 長老にしても顔役にしても、普段は農業をしているわけですね。ネアク・タのために専従で職についているわけではないですね。

アン氏 彼らは普通の人です。ほとんどの場合は、組織的に決められているわけではなく、数年、僧侶の修業を受けた人などいます。そういった人が尊敬を集めます。

石澤氏 村には、(仏教儀礼を司る)アチャーという人がいますね。その人とはどういう違いがありますか。

アン氏 多くの場合、アチャーを兼任していたりします。

この場合、アチャーとしてではなく、アチャーがコミュニティの中で尊敬されているのでネアク・タの儀式を執り行うのです。

石澤氏 次に、これだけ都市化が進むと、ネアク・タは都市の中でどんな存在なのでしょう。

アン氏 ネアク・タはジャズコンサートのように即興でできます。決まりきった文言は必要ないのです。お経のようなものではありません。神官も必要ないわけです。そういったネアク・タの真髄は、村の領域を超えて都市にも及んでいると思います。

石澤氏 今起こっている自分にとって一番大切な、例えば牛を守って下さいとか病気を直して下さいとかそういうことを祈るわけですね。次の質問ですが、クメールルージュ時代に、カンボジアのネアク・タ信仰は迫害されたのでしょうか。

アン氏 クメールルージュの兵士はほとんどが農村の出身で、ネアク・タを信じていましたし、仏教を信じていました。しかし、政治的イデオロギーですべての信仰が禁止されました。仏教もヒンズー教もすべてです。あらゆる信仰に係る行為は禁止されました。そのような状況がしばらく続いたにも関わらず、なぜネアク・タ信仰が今も残っているのか。それは、人々の心の中にある信仰を消すことはできないからだだと思います。



第2部 クメールクラシックをあなたに～

今回のために特別にカンボジアから招いたクメールクラシックの名手たちによる伝統音楽の演奏が披露されました。クメールの伝統音楽にはいくつかの種類があります。仏教寺院などで演奏されるものは「ブンピアット」と呼ばれる合奏音楽。精霊信仰における祈りでは「プレーン・アラク」、結婚式では「プレーン・カー」。そして日常的な楽しみのために演奏される「モハオリー」などのアンサンブルがあり、使用される楽器も異なります。フォーラムではさまざまなジャンルの計18曲が披露されました。



VOICE

岩下真理さん
(福岡市東区)、
野田玲子さん
(福岡県筑紫野市)

「カンボジアに興味があり、学生時代は現地へ5回ほど足を運びました。アン・チュリアンさんの講演では、農村の文化についてのお話が興味深かったです。伝統音楽の演奏も現地で聴いた音楽を思い出して、とても懐かしく感じました」

アジア文化サロン

実施日/9月17日 会場/九州大学

アン・チュリアン氏の文化サロンは、東南アジア学会の九州例会と共同開催で開かれ、立命館アジア太平洋大学の笹川秀夫准教授や研究者など約10人が参加しました。

アン氏は、遺跡に代表される有形の文化財と、地域住民の宗教文化という無形文化財との結びつきについて、研究者が扱う「真」の歴史だけが遺跡にまつわる歴史として重要なのではなく、地域住民にとっての遺跡、歴史を検討することが重要だと語りました。また、現代の儀礼やその建物を遺跡と対比しつつ論じ、考古学者、建築家、美術史家が遺跡を扱う場合、過去の説明に終始するのではなく、現在のカンボジアで何が起きているかを知ることも、重要であると力説されました。続けて、精霊信仰ネアク・タに関する儀礼が詳細に示され、稲作と儀礼の結びつきの説明とともに、ポル・ポト時代の断絶、近年の都市化や社会の変化によって、こうした儀礼が消滅しつつあることにも言及されました。

続いて参加者と、遺跡や文化財、観光などについて、近年のカンボジア政府や官公庁が抱く考えと、地域住民にとっての文化の違い、アイデンティティ形成の源であった稲作の将来などについて熱い議論が重ねられました。

